

## ニヤーヤ学派の主張命題の学説に対する ダルマキールティの批判について

小 野 基

### 0. はじめに

本稿の目的は、ダルマキールティの *Pramāṇavārttika* (PV) 第四章第 164-172 偈を解釈する手掛りとして、その背景にあるディグナーガ以来のニヤーヤ学派と仏教徒の間に展開された主張命題 (*pratijñā*) の定義をめぐる論争を後づけることにある。問題の PV の九偈は *Nyāyasūtra* (NS) における主張命題の定義を批判するディグナーガの *Pramāṇasamuccaya* (PS) 第三章第 3-4 偈に対する註釈であり、このディグナーガの所説に対してはニヤーヤ学派のウッディヨータカラがその主著 *Nyāyavārttika* (NV) において詳細な反論を展開しているが、結論を先取りするならば、問題の PV の九偈は、ウッディヨータカラが展開したこの反論への再反論として位置づけることが可能である。

なお本稿の論述は、まずはじめに論争の出発点となったディグナーガによるニヤーヤ学派の主張命題の定義に対する批判を概観した後、それに対するウッディヨータカラの反論を検討し、最後にダルマキールティの所説が具体的にウッディヨータカラの反論を踏まえている様相を明らかにするという順序で進める。

### 1. ディグナーガの批判

ニヤーヤ学派の主張命題の定義は *sādhya-nirdeśaḥ pratijñā* (NS. 1. 1. 33.) 「主張命題とは *sādhya* の提示である」というものであるが、ディグナーガは PS とそれに対する自註において、これを次の三つの観点から批判している<sup>1)</sup>。

(1) *sādhya* という語は *siddha* の否定を意味するから、この定義では未確証のもの (*asiddha*) の提示がすべて主張命題となり、不成因 (*asiddha*) や未確証の実例 (*dr̥ṣṭānta*) 等の提示が主張命題に含まれることになる。

(2) 命題中の主題 (*dharmin*) が *sādhya* か、属性 (*dharma*) が *sādhya* か、あるいはその両方かのいずれかのはずであるが、いずれにしても不都合が生じる。

つまり、もしも属性が *sādhya* であれば、「ことばは無常である」という主張命題の場合には「ことばの無常性」が *sādhya* になるが、「ことば」以外に「ことばの無常性」を持つものは存在しないので、実例を提示することが不可能となる。他方、主題が *sādhya* であれば「無常なることば」が前提されていることになるから、改めて論証式を立てることは無意味となる。

(3) 主張命題の定義の命題文には、限定詞である *sādhya-nirdeśaḥ* を強調して命題解釈する可能性と、被限定詞である *pratijñā* を強調して命題解釈する可能性とがあるが、いずれにしても不都合が生じる。すなわち、前者の場合には定義自体が無意味となり、後者の場合には論証因や実例の提示もまた主張命題となる拡大解釈の可能性が生じる。

## 2. ウッディヨータカラの反論

NS. 1. 1. 33 に対する NV は、仏教徒の反論に対する自派の学説の擁護に携わる前半と、仏教徒の主張命題の定義に対する積極的批判を行う後半とに大別されるが、その前半部でウッディヨータカラは上述のディグナーガの PS とそれに対する自註における批判のすべてを取り上げ、各々に次のような反論を加えている。

(1) まず、ディグナーガの第一の批判に対しては、ウッディヨータカラは六つの観点から回答しているが、ここでは後のダルマキールティの再反論と直接的に関連すると思われる四つの反論を挙げておく。

①未確証の論証因や実例が主張命題に含まれることになるという批判は、註釈で述べられているような限定を仏教徒が無視し、経の理解が完全でないために起こる。すなわち、ニヤーヤ学派は属性によって限定された主題の陳述を主張命題とするのであるから、属性である不成因等が主張命題となることはない<sup>2)</sup>。

②「*sādhya* の提示」という場合の *sādhya* は、直前の第 26-31 経で取り上げられた定説 (*siddhanta*) という語を受けており、この語によって限定されている。従って、この定義で意味されているのは定説としての *sādhya* であるから、論証因や実例を意味することにはならない<sup>3)</sup>。

③*sādhya* という語は「～に値する」といった意味を表わす *kṛtya* 語尾を伴っている。従って、論証に値しない論証因や実例が主張命題となることはない<sup>4)</sup>。

④行為対象 (*karma*) と行為手段 (*karāṇa*) とは別ものであり、両者は区別されねばならない。主張命題の定義においては、*sādhya* の提示は行為対象の提示であり、他方論証因等は行為手段を提示するものであるから、論証因等が主張命題と

(92) ニヤーナ学派の主張命題の学説に対するダルマキールティの批判(小野)

なることはない<sup>5)</sup>。

(2) 次に、ディグナーガの第二の批判に関しては、ウッディヨータカラは先述の(1)の①で属性が *sādhya* であるという見解は明確に否定しているので、残る問題は「主題が *sādhya* である場合には改めて論証式を立てることは無意味となる」という批判にいかほど回答するかである。これについてはウッディヨータカラは次のように述べている。

主題一般が *sādhya* なのではなくて、示されるべき (*prajñāpanīya*) 属性によって限定された主題が *sādhya* である。「示されるべき」といっても、限定づける属性は未知のものではなく、「壺」における「無常性」としてあらかじめ知られているものであるが、「ことば」にとっては *sādhya* である。従って、「無常性」一般が *sādhya* ではないし、また主題一般が *sādhya* であるのでもない。結局、主題としての「ことば」と「ことば」以外のものの属性としては既知の「無常性」との間の限定被限定関係 (*viśeṣaṇaviśeṣyabhāva*) を確定することが *sādhya* である。そしてその場合に限定されるのは主題である<sup>6)</sup>。

(3) 最後にディグナーガの第三の批判に対する反論は次のようなものである。

あらゆる命題に関して命題解釈が要求されるわけではない。命題解釈というのは、同じ言葉から構成されているある文章が多義的に理解される可能性があるような場合に、拡大解釈を防ぐためになされるものであり、問題の主張命題の定義のように、拡大解釈の余地がないときには必要がない<sup>7)</sup>。

### 3. ダルマキールティの再反論

ここでは、ダルマキールティの PV 第四章第 164-第 172 偈の大部分が、各々以上のウッディヨータカラの反論に対する再反論として位置づけられることを具体的に示す。

(1) まずはじめに、ディグナーガの第一の批判に対するウッディヨータカラの反論が第 164-168 偈で論駁されている。

①第一に、「註釈の限定 (*viśeṣa*) が正しく理解されていない」という反論が第 165-166 偈で論駁されている。

②また、「*sādhya* は直前の経で取り上げられた定説という語を受けている」との反論に対しては第 168 偈で、主張命題は「承認された定説」(*abhyupagamasiddhanta*) に過ぎず、その意味では論証因や実例の命題と少しも資格が変わらないとされている。

③「kṛtya 語尾は「～に値する」といった意味を持っている」という反論に対しては第 164 偈で、kṛtya 語尾の時間要素を問題にしなから「kṛtya 語尾は過去・現在・未来の三時を対象領域にする」と述べ、未来をも意味する kṛtya 語尾は論証因や実例を意味し得るとされている。

④「行為対象としての主張命題と行為手段としての論証因等は区別されねばならない」との反論に対しては第 167 偈で、「(主張命題も論証因も実例も) すべて、すでに確立されたものであるわけではないのだから、行為対象等の違いを立てる反論によって区別することは不可能である」と述べられている。

(2) 次に、ウッディヨータカラが「sādhya とは主題と属性との間の限定被限定関係の確定であり、その際限定されるのは主題である」と述べたのに対しては、第 169 偈で、「(主題と属性の) 両者の相互規定が sādhya であるとしてもディグナーガが指摘したような問題は残る」とし、また第 170 偈では、ウッディヨータカラが「限定被限定関係で、限定されるのは主題である」と述べたことが批判されている。

(3) 最後に、主張命題の命題解釈をすることは無意味であるという批判に対応するのが、第 171-第 172 偈である。しかし、ここではダルマキールティはディグナーガの述べた議論を繰り返すにとどまっておき、ウッディヨータカラの反論に有効に反論し得ているとは言えないようである。

#### 4. おわりに

上述のような緊密な対応関係からみて、PV 第四章第 164-172 偈におけるダルマキールティの議論が NV の反論を踏まえたものであることはほぼ間違いがない。この部分は NV の PV に対する直接的な影響を確認することのできる数少ない箇所の一つとして注目に値すると言えよう。なお、同偈の和訳解釈研究に関しては別稿を期す。

- 
- 1) *Pramāṇasamuccayaṅgīti*, tr. by Kanakavarman, Peking ed. No. 5702, Ce 125b2-126a2. 2) *Nyāyavārttika* (NV), in *Nyāyadarśanam*, Rinsen Sanskrit Text Series I, Kyoto, 1982, p. 274, l. 5-7. 3) NV, p. 275, l. 7-10. 4) NV, p. 276, l. 7-9. 5) NV, p. 276, l. 10-13. 6) NV, p. 272, l. 9-18. 7) NV, p. 273, l. 4-p. 274, l. 3.

〈キーワード〉 主張命題の定義, *Nyāyavārttika*, *Pramāṇavārttika*

(筑波大学大学院)